

「かえる」と「かえす」の意味分析

—日本語教育の観点から—

李 澤 熊

キーワード：多義語、多義構造、比喩、コロケーション、誤用例分析

1. はじめに

動詞「かえる」と「かえす」（注1）は基本動詞として扱われ、日本語教育において重要な学習項目の1つとなっている。しかし、「かえる」と「かえす」は多様な意味を担っている多義語（注2）であるため、その学習指導方法というのは必ずしも容易ではない。

さて、現在刊行されている辞典・辞書類を調べてみると、「かえる」と「かえす」は多義語として扱われているが、それらの意味を選んで掲げる基準は必ずしも明らかではない。また、当然のことながらそれぞれの意味の相互関係も不明確である。

そこで、本稿ではまず「かえる」と「かえす」が持つそれぞれの複数の意味を記述し、それらの複数の意味の関連性（多義構造）を明らかにする。また、この2語は自・他対応動詞であるということもあり、別義間の対応関係についても検討する。

次に、以上の分析に基づき、それぞれの別義の効果的な学習指導方法について考察する。具体的には、各別義における「コロケーション」を提示することによって学習を促すとともに、各別義において想定され得る「誤用例」も提示し、その理由・原因について検討する。

なお、「かえる」と「かえす」の複数の意味の関連性については、隠喩（メタファー）、提喩（シネクドキー）、換喩（メトニミー）という3つの比喩の観点から考察する（注3）。それぞれの定義は初山・深田（2003）に従い、以下のように示す。

メタファー：2つの事物・概念の何らかの類似性に基づいて、一方の事物・概念を表す形式を用いて、他方の事物・概念を表すという比喩。

「類似性に基づく」というのは、2つの事物・概念に類似性が内在しているというよりも、人間が2つの対象の間に主体的に類似性を見出すことを表していると考えたほうが適切である（p.76）。

シネクドキー：より一般的な意味をもつ形式を用いて、より特殊な意味を表す、あるいは逆により特殊な意味をもつ形式を用いて、より一般的な意味を表す比喩（p.79）。

メトニミー：2つの事物の外界における隣接性、さらに広く2つの事物・概念の思考内、概念上の関連性に基づいて、一方の事物・概念を表す形式を用いて、他方の事物・概念を表す比喩（p.83）。

2. 「かえる」と「かえす」の意味分析

2.1. 「かえる」

本節では、「かえる」について6つの多義的別義を認め、考察を行う。

2.1.1. 多義的別義（1）（基本義）：＜あるものの＞＜向き・位置が＞＜反対に＞＜なる＞ （「かえす」別義（1）に対応）

- (1) 先日買ったワンピースは、素材の問題なのか、すぐ袖が返ってしまう。
- (2) 両力士が仕切り線に手をつくとき、行司の軍配が返った。
- (3) お餅が網にくっついて、上手く返らない。
- (4) (柔道で) 映像を見ると、相手の体が返って背中が畳に完全についています。

別義（1）は、上（向き）であったものが下（向き）になる、あるいは表であったものが裏になるというように、向きや位置が反対になることを表す。例えば、例（1）の場合「ワンピースの袖が（着ているうちに）すぐ反対（裏返し）になってしまう」というようにとらえられる。

2.1.2. 多義的別義（2）：＜あるもの・こと（の状態）が＞＜もとの状態に＞＜なる＞ （「かえす」別義（3）に対応）

- (5) 葉は枯れて、やがて自然に還る。
- (6) この風船は自然に還る素材でできている。
- (7) どんなに偉大な人でも、いつかは死んで土に還る。
- (8) 地元の夏祭りに行くと、童心に返ったような気分になる。
- (9) うまいかないときは、もう一度基本に返って今の自分に何が足りないのかを考えてみる。
- (10) 政府は、この法案については原点に返って再考する必要がある。

まず、例（5）～（7）ではそれぞれ「葉」「風船」「（人の）死体」というもの（具体物）が問題になっており、例（8）～（10）ではそれぞれ「（話者の）心情」「（話者の）

計画・考え」「(法案に対する政府の)方針」という事柄(抽象物)が問題になっていると考えられる。

また、文の状況から分かるように、問題となっているものや事柄は「もとの状態・最初の状態になる」ということを表していると考えられる。

さて、別義(2)は別義(1)と類似性が認められることから、隠喩(メタファー)による意味の転用であると考えられる。つまり、別義(2)と別義(1)の間からは「ある対象物が対極に位置する(変化する前後の状態が対極的である)」という共通の意味特徴を導き出すことができるということである。

なお、漢字表記は一般的に「返」を使うが、「木(葉・遺骨)が自然(土・森)に還る」というように、対象物が具体物の場合は「還」を使うこともある。

2.1.3. 多義的別義(3): <あるものが><もとの持ち主のところに><移動する> (「かえす」別義(4)に対応)

- (11) 盗まれた絵画が美術館に無事返ってきた。
- (12) 電車で落とした財布が返ってきたときは、本当に嬉しかった。
- (13) 会社が倒産してしまい、投資したお金が返ってこない。
- (14) (図書館で) お探しの本は今貸出中ですので、返ってきましたらご連絡します。

別義(2)は、「ある対象物がもとの状態になる」ということを表しているが、この「かえる」は、「ある対象物がもとの持ち主のところに移動する」ということを表している。ただし、いずれも「ある対象物が本来存在すべきところに位置する」という点で共通している。つまり、別義(3)は、別義(2)から隠喩(メタファー)によって意味拡張が成り立っていると考えられる。

2.1.4. 多義的別義(4): <人・組織・動物が><本来の居場所に><移動する> (「かえす」別義(5)に対応)

- (15) 妻が出産のために実家に帰った。
- (16) エサを見つけたアリが、巣に帰って仲間に知らせる。
- (17) 自衛隊が半年間の任務を終えて本国に帰ってきた。
- (18) 2時間を過ぎたあたりから、ランナーたちが陸上競技場に次々と帰ってくる。

別義(2)は、「ある対象物がもとの状態になる」ということを表しているが、この「か

える」は、「人や動物が本来の居場所に移動する」ということを表している。ただし、いずれも「ある対象物が本来存在すべきところに位置する」という点で共通している。つまり、別義(4)は、別義(2)から隠喩(メタファー)によって意味拡張が成り立っていると考えられる。

なお、漢字表記であるが、別義(4)で用いられる場合は、一般的に「帰」を使う。

2.1.5. 多義的別義(5)：<主体(話者)からの><行為・働きかけに対して><相手から><同等な対応が><なされる> (「かえす」別義(6)に対応)

- (19) 誰に聞いても同じ答えしか返ってこない。
- (20) 山に向かって「ヤッホー」と叫んだら、こだまが返ってきた。
- (21) 学会の発表で、フロアーから厳しい質問が返ってきた。
- (22) 先輩看護師に助言を求めたところ、冷たい視線が返ってくるだけであった。
- (23) 先日行われたワインの試飲会で、審査員から非常に高い評価が返ってきました。

別義(3)は「貸したり、預けたりしたもの(具体物)がもとの持ち主のところに移動する」ということを表すのに対して、この「かえる」は、「相手から主体(話者)に対して(具体物ではなく)何らかの行為や働きかけがなされる」ということを表す。ただし、いずれも「何らかのものがもとのところに移動する」という点では共通していると考えられる。というのは、例えば「観客に向かって手をふったら、笑顔が返ってきた」という表現において、「相手に対する「手をふる」という行為が「笑顔」という形で、本来の場所である主体(話者)のところに移動する」というようにとらえられるということである。このことから、別義(5)は別義(3)から隠喩(メタファー)によって意味拡張が成り立っていると考えられる。

2.1.6. 多義的別義(6)：<(主に鳥類の)卵が><雛に><なる> (「かえす」別義(7)に対応)

- (24) 鶏の雛が卵から孵った。
- (25) ウミガメの卵はどのくらいの期間で孵るんですか。
- (26) 孵卵器で孵った卵は親が育てないって本当ですか。
- (27) 6月に入ると、めだかの卵が次々と孵った。

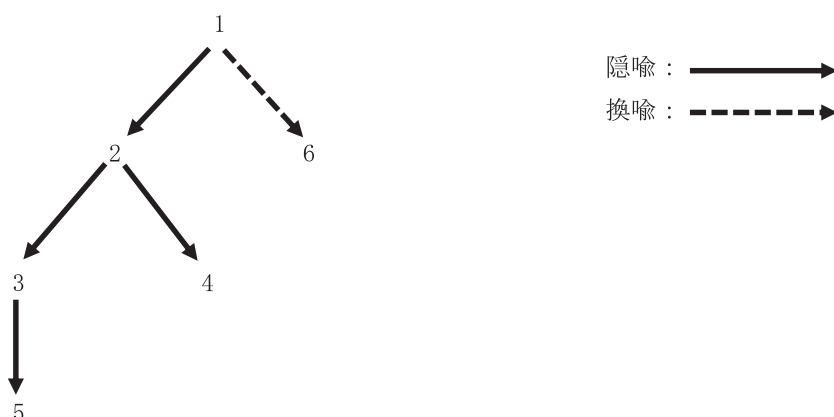
別義(1)は、「ある対象物の向きや位置が反対になる」ということを表しているが、

この「かえる」は、「鳥類の卵が孵化する」ということを表している。これは、鳥が（巣の中の）卵を、表と裏が逆になるように動かしながら、均等に温めるというところから来ていると考えられる。つまり、「卵がかえる」ことによって「孵化する」というようにとらえられ、別義（1）とは原因と結果の関係にあると考えられる。このことから、別義（6）は別義（1）から換喩（メトニミー）によって意味拡張が成り立っていると考えられる。

なお、漢字表記であるが、別義（6）で用いられる場合は、一般的に「孵」を使う。

以上、本節では「かえる」について、6つの多義的別義を認め、分析を行った。また、別義間の関連性については比喩の観点から説明した。なお、「かえる」は以下のような多義構造を成していると考えられる。

<図1> 「かえる」の多義構造



2.2. 「かえす」

本節では、「かえす」について8つの多義的別義を認め、考察を行う。

2.2.1. 多義的別義（1）（基本義）：＜人が＞＜あるものの向き・位置を＞＜逆になるように＞＜する＞（「かえる」別義（1）に対応）

- (28) 脱いだズボンは表に返して洗濯に出してください。
- (29) 商品を裏に返して、傷がないか確認する。
- (30) 餅を返しながら、こんがり焼きあげる。
- (31) 直射日光が強いときは、洗濯物を裏に返して干す。
- (32) あのレスリング選手は素早く体を返して、反撃に出た。

別義(1)は、人がある対象物に対して、上(向き)であったものを下(向き)にする、あるいは表であったものを裏にするというように、向きや位置を反対にすることによって表す。例えば、例(31)の場合「洗濯物を表と裏が逆になるようにして干す」というようにとらえられる。なお、別義(1)における「対象物」は「襟、袖、座布団、カード」などのような「もの」が一般的であるが、「体、手のひら」のように身体部位も「対象物」として用いられることがある。

2.2.2. 多義的別義(2): <人が><あるものを><もとのところに><移動させる>

- (33) 読み終わった本は棚に返してください。
(34) 洗ったお皿は、すぐに拭いて食器棚に返す。
(35) 昨年買ったお守りを神社に返してきた。

別義(1)は、「ある対象物の向きや位置を反対にする」ということを表しているが、この「かえす」は、「ある対象物をもとの場所に移動させる」ということを表している。ただし、いずれも「ある対象物を対極に位置させる(変化する前後の状態が対極的である)」という点で共通している。つまり、別義(2)は、別義(1)から隠喩(メタファー)によって意味拡張が成り立っていると考えられる。

なお、この「かえす」は「寄せては返す波の音」のように、本来、他動詞であるものが自動詞として使われる場合があり、いわゆる「再帰中間態(国広(1996))」と呼ばれる用法であると考えられる。つまり、「波が返す」とは「自らを(沖のほう(もとの場所)へ)返す」という意味構造で、表現としては「自らを」が省略されるというものである。こう考えると、「自らをもとの場所に移動させる」というようにとらえられ、他動詞として使われる他の別義との関係も明確になる。

2.2.3. 多義的別義(3): <人が><あるもの・ことを><もとの状態どおりに><する> (「かえる」別義(2)に対応)

- (36) 父親の遺言どおり、遺骨は故郷の海に返すことにした。
(37) この町では、生ゴミを自然に返す取り組みをしている。
(38) 改革案を白紙に返す。
(39) 一度、話を原点に返す必要がある。

まず、例(36)(37)ではそれぞれ「遺骨」「生ゴミ」というもの(具体物)が対象物

となっており、例（38）（39）ではそれぞれ「改革案」「話」という事柄（抽象物）が対象物になっていると考えられる。また、文の状況から分かるように、対象物となっているものや事柄を「もとの状態・最初の状態にする」というようにとらえることができる。

さて、別義（3）は別義（1）と類似性が認められることから、隠喩（メタファー）による意味の転用であると考えられる。つまり、別義（3）と別義（1）の間から「ある対象物を対極に位置させる（変化する前後の状態が対極的である）」という共通の意味特徴を導き出すことができるということである。

2.2.4. 多義的別義（4）：＜人・組織が＞＜借りた（預かった）ものを＞＜もとの持ち主のところに＞＜移動させる＞（「かえる」別義（3）に対応）

- （40）友達に、貸していたお金を返してもらった。
- （41）住宅ローンを固定金利と変動金利のどちらの方法で返すか悩んでいる。
- （42）借りた土地の期限がそろそろ切れるので、地主に返さなければならない。
- （43）この自治体は、財政悪化で国から借りたお金を返せなくなってしまった。

この「かえす」は、別義（2）と同様に「ある対象物をもとの場所に移動させる」ということを表す。ただし、「借りたり、預かったりした対象物を持ち主のところに移動させる」という、より限定された意味で使われるというようにとらえることができる。つまり、別義（4）は別義（2）がさらに限定されたものととらえられ、提喩（シネクドキー）によって意味拡張が成り立っていると考えられる。

2.2.5. 多義的別義（5）：＜人・組織が＞＜ある人・動物を＞＜本来の居場所に＞＜移動させる＞（「かえる」別義（4）に対応）

- （44）台風が近づいてきたため、生徒たちを家に帰すこととなった。
- （45）妊娠中の嫁を実家に帰す。
- （46）先月の国会で、すべての兵士を本国に帰すことが決まった。
- （47）飼育されていたイルカを自然の海に帰すのは容易なことではない。
- （48）（野球で）二死満塁のチャンスでピッチャーゴロとなつてしまい、走者を帰すことができなかった。

この「かえす」は、別義（2）と同様に「ある対象物をもとの場所に移動させる」ということを表す。ただし、「ある人や動物を本来の居場所に移動させる」という、より限定

された意味で使われるというようにとらえることができる。つまり、別義(5)は別義(2)がさらに限定されたものととらえられ、提喩(シネクドキー)によって意味拡張が成り立っていると考えられる。

なお、漢字表記であるが、別義(5)で用いられる場合は、一般的に「帰」を使う。

2.2.6. 多義的別義(6): <人が><相手からの行為や働きかけに対して><それと同等な対応を><する> (「かえる」別義(5)に対応)

- (49) 「ありがとう」と感謝の言葉を返す。
- (50) 仕事をやめたいという夫に、どう返答を返せばいいか悩んでいる。
- (51) 花子は太郎の態度を不愉快に感じ、冷たい視線を返した。
- (52) 日本は、後半2点を返して逆転に成功した。
- (53) 学会で、発表者に質問をしたら、質問で返されてしまった。

別義(4)は「人が借りたり、預かったりしたもの(具体物)をもとの持ち主のところに移動させる」ということを表すのに対して、この「かえす」は、「人が相手に対して(具体物の移動ではなく)何らかの行為や働きかけをする」ということを表す。ただし、いずれも「人が何らかのものをもとのところに移動させる」という点では共通していると考えられる。というのは、「観客の声援に笑顔でかえす」という表現において、「相手(観客)から受けた声援」を「笑顔」という形で、本来の場所である相手(観客)のところに移動させる」というようにとらえられるということである。このことから、別義(6)は、別義(4)から隠喩(メタファー)によって意味拡張が成り立っていると考えられる。

2.2.7. 多義的別義(7): <(主に)鳥類が><卵を温めて><雛を><誕生させる> (「かえる」別義(6)に対応)

- (54) 卵を人工的に孵すのは、簡単なことではない。
- (55) この鳥は、地面に巣を作り一度に10から15個の卵を孵す。
- (56) 皇帝ペンギンはオスが卵を孵すって本当ですか。
- (57) 田舎の実家で飼っている鶏が、この前初めて雛を孵した。

別義(1)は、「ある対象物の向きや位置を反対にする」ということを表しているが、この「かえす」は、「鳥類が卵を孵化する」ということを表している。これは、鳥が(巣

の中の) 卵を、表と裏が逆になるように動かしながら、均等に温めるというところから来ていると考えられる。つまり、「卵をかえす」という手段で、「孵化する」という目的を表しているということである。このことから、別義(7)は別義(1)から手段と目的の関係に基づく換喩(メトニミー)によって意味拡張が成り立っていると考えられる。

なお、漢字表記であるが、別義(7)で用いられる場合は、一般的に「孵」を使う。

2.2.8. 多義的別義(8)：＜人が＞＜(田畑の)土を＞＜耕す＞

(58) 作物がよく育つように、土を返す。

(59) 収穫が終わった畑から、順次土を返す作業を行います。

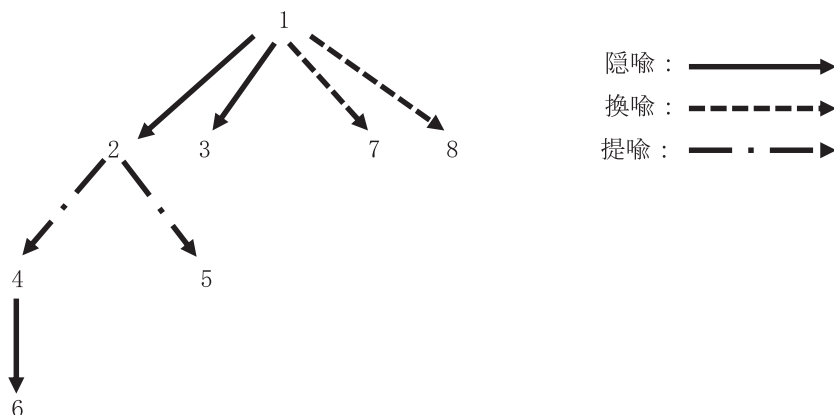
(60) 畑の土を返す前に、先に肥料をまいておいてください。

(61) 耕運機が入らない狭い棚田などでは、手作業で田を返さなければならない。

別義(1)は「ある対象物の向きや位置を逆になるようにする」ということを表しているが、この「かえす」は、あるもの(土)の向きを逆にする、つまり掘りかえすことによって「(農作物などがよく育つように)土を耕す」ということを表している。このことから、別義(8)は別義(1)から手段と目的の関係に基づく換喩(メトニミー)によって意味拡張が成り立っていると考えられる。

以上、本節では「かえす」について、8つの多義的別義を認め、分析を行った。また、別義間の関連性については比喩の観点から説明した。なお、「かえす」は以下のような多義構造を成していると考えられる。

＜図2＞「かえす」の多義構造



3. 日本語教育の観点からの考察—コロケーションの提示と誤用例分析—

本節では、以上の「かえる」と「かえず」の分析に基づき、それぞれの別義の効果的な学習指導方法について考察する。具体的には、各別義の「コロケーション」を提示することによって学習を促すとともに、各別義において想定され得る「誤用例」も提示し、その理由・原因について検討する。

3.1. 「かえる」

3.1.1. 多義的別義 (1)

「コロケーション」

＜もの（の側面）＞がかえる：襟、裾、袖、軍配、体、手首

＜方向＞に（へ）かえる：表、後ろ、裏側、内側、外側

＜様態＞かえる：ゆっくり、くるり（と）、簡単に、完全に、すぐ、なかなか

「誤用例」

(62) a ×いすの背もたれがこっち側に {返っている}。

b ○いすの背もたれがこっち側に {向いている}。

→基本的に、上下・表裏が反対になる場合に使われる。前後など単に向きが反対になる場合は使いにくい。

3.1.2. 多義的別義 (2)

「コロケーション」

＜組織＞がかえる：国、政府、委員会、協議会、与党

＜もの＞がかえる：木、葉、灰、遺骨、ゴミ

＜場所＞にかえる：土、海、山、自然、大地、森

＜状態＞にかえる：童心、原点、正気、初心、基本、（本来の）姿、無

＜様態＞かえる：いつか、やがて、いずれ、一度、即座に、絶対、完全に、永遠に

「誤用例」＜状態＞にかえる

(63) a ?元の体重に {かえる}。

b ○元の体重に {戻る}。

(64) a ○あの二人は、元の仲の良い夫婦に {返った}。

b ○あの二人は、元の仲の良い夫婦に {戻った}。

→「かえる」は「本来の（あるべき）状態になる」ということを表すため、単に以前の状態になる場合は使いにくい。

3.1.3. 多義的別義 (3)

「コロケーション」

- ＜もの＞がかえる：お金、過払い金、税金、敷金、土地、資産、手紙、紛失物
- ＜人・組織＞にかえる：持ち主、本人、投資家、地主、国民、市、美術館
- ＜人・組織＞からかえる：依頼者、契約者、警察、取引先、税務署
- ＜様態＞かえる：確実に、迅速に、無事、ようやく、ちゃんと、簡単に、全然、全く

「誤用例」＜もの＞がかえる

- (65) a ? 買い物をして、実際の金額と違う領収書が {返ってきた}。
- b ○ 買い物をして、実際の金額と違う領収書が {発行された}。
- c ○ 買い物をして、実際の金額と違う領収書を {渡された}。

→ 貸したり預けたりしたものでない場合は使いにくい。

3.1.4. 多義的別義 (4)

「コロケーション」

- ＜人・組織・動物＞がかえる：生徒、妻、走者、同志、軍隊、視察団、渡り鳥、アリ
- ＜本拠地＞に（へ）かえる：実家、祖国、本社、地元、ホーム（ベース）、森、巢
- ＜活動・場所＞からかえる：仕事、買い物、旅行、出張（先）、学校、アメリカ
- ＜手段・方法＞でかえる：電車、バス、地下鉄、ひとり、みんな
- ＜時期＞かえる：だいぶ前に、ついさっき、春に、夜遅く、昔に、子供の頃に
- ＜様態＞かえる：久しぶりに、速やかに、急に、永久に、いったん

「誤用例」

- (66) a ? 先にタクシーに {帰って} 待っています。
- b ○ 先にタクシーに {戻って} 待っています。

→ この「かえる」は単に元いた場所に移動する場合は使いにくい。つまり、「（いわゆる）本拠地」としてとらえられる場合でないと使えない。

3.1.5. 多義的別義 (5)

「コロケーション」

- ＜物事＞がかえる：返事、反応、言葉、回答、笑顔、反論、視線、質問、挨拶、評価
- ＜相手＞からかえる：担当者、受講者、消費者、お客さん、政府、役所、恩師、上司
- ＜手段・方法＞でかえる：郵送、メール、英語、ファクス、添付ファイル形式
- ＜様態＞かえる：ちゃんと、やっと、きちんと、すぐさま、いきなり、きっちり

「誤用例」

- (67) a ? 返事が太郎から {返って} きた。

b ○太郎から返事が {返って} きた。

→文中に<物事>が表れる場合、語順は「相手から物事が」のほうが自然である。

3.1.6. 多義的別義 (6)

「コロケーション」

<卵・雛>がかえる：卵、雛、ひよこ

<場所>でかえる：体内、水の中、湿ったところ、岩盤の下、屋内

<方法・手段・道具>でかえる：人の手、人間の手、地熱、孵卵器、孵化器

<様態>かえる：もうすぐ、やがて、あっさり、簡単に、一瞬で、次々（と）

3.2. 「かえす」

3.2.1. 多義的別義 (1)

「コロケーション」

<もの（の側面）>をかえす：カード、手のひら、裏、表面、座布団、襟、紙、マツ
トレス

<方向>に（へ）かえす：裏、表、内側、外側、上、下、左右

<様態>かえす：素早く、ゆっくり、しっかり、ちゃんと、急に、くるり（と）

「誤用例」<人>をかえす

(68) a ×顔を {返す}。

b ○顔を後ろに {向ける}。

c ○ {振り向く}。

→基本的に、上下・表裏の場合に使われる。

3.2.2. 多義的別義 (2)

「コロケーション」

<もの>をかえす：本、雑誌、皿、器、道具

<場所>にかえす：棚、食器棚、もとの場所、台所、教室、戸棚

<様態>かえす：直ちに、すぐに、きちんと、ちゃんと

3.2.3. 多義的別義 (3)

「コロケーション」

<もの>をかえす：遺灰、遺骨、ゴミ、灰、廃材

<こと>をかえす：議論、論点、論争、話、問題

<場所>にかえす：大地、海、山、森

＜状態＞にかえす：もとの状態、以前の体制、白紙、旧状、原点、自然

＜様態＞かえす：きちんと、ちゃんと、必ず、いずれ、いったん、一度

「誤用例」＜もの＞をかえす

(69) a ×時計の針を {返す}。

b ○時計の針を {戻す}。

(70) a ×（水に浸して）ワカメを {返す}。

b ○（水に浸して）ワカメを {戻す}。

→単に、以前の状態にする場合は使いにくい。

3.2.4. 多義的別義 (4)

「コロケーション」

＜もの＞をかえす：借金、お金、借りた本、おつり、ローン、借地、レンタカー

＜人・組織＞にかえす：持ち主、株主、地主、所有者、国、銀行

＜手段・方法＞でかえす：ボーナス、ローン、金利3%、品物、現物、土地

＜様態＞かえす：ちゃんと、直ちに、ゆっくり、しぶしぶ、自力で、必ず、絶対に

「誤用例」＜もの＞をかえす

(71) a ?レシートを {お返しします}。

b ○レシートを {お渡しします}。

c ○おつりを {お返しします [お渡しします]}。

→借りたり、預かったりしたものでない場合は使いにくい。

3.2.5. 多義的別義 (5)

「コロケーション」

＜人・動物＞をかえす：妻子、家族、生徒、ランナー、走者、社員、渡り鳥、イルカ

＜本拠地＞にかえす：家、実家、本社、本国、森、海、ホーム（ベース）

＜様態＞かえす：直ちに、すぐさま、急遽、ちゃんと、無理矢理、やむを得ず

「誤用例」＜人＞を帰す

(72) a ?（部下が）上司を本社に {帰す}。

b ○（上司が）部下を本社に {帰す}。

→上司や先輩など、目上の人には使いにくい。

3.2.6. 多義的別義 (6)

「コロケーション」

＜相手＞にかえす：恩師、友人、両親、家族、同僚

＜物事＞をかえす：言葉、返事、質問、挨拶、笑顔、会釈、視線、歌

＜手段・方法＞でかえす：言葉、笑顔、口調、無言、表情

＜様態＞かえす：ちゃんと、きちんと、そのまま、いきなり、はっきり、やんわり

「誤用例」

(73) a ? 太郎が（私に）笑顔で言葉を {返した}。

b ○太郎が（私に）笑顔で言葉を {返してくれた [返してきた]}。

c ○（私が）太郎に笑顔で言葉を {返した}。

→相手（他人）が話者側に働きかける場合は、「～てくれる」「～てくる」などを用いないと不自然な表現になるが、話者側から相手（他人）に働きかける場合は、そのような制限はない。

3.2.7. 多義的別義 (7)

「コロケーション」

＜鳥類＞がかえす：鳥、鶏、ペンギン、渡り鳥、スズメ

＜卵・雛＞をかえす：卵、雛、ひよこ

＜場所＞でかえす：体内、お腹の中、湿ったところ、岩盤の下、家の中

＜方法・手段・道具＞でかえす：人の手、人間の手、自分、地熱、孵卵器

3.2.8. 多義的別義 (8)

「コロケーション」

＜土＞をかえす：土、田、畑の土、田畑の土、田んぼの土

＜手段・方法・道具＞でかえす：自力、皆、一人、手作業、耕運機、重機

＜様態＞かえす：ちゃんと、きちんと、しっかり、すぐに、順次

「誤用例」＜土＞をかえす

(74) a ? 家を建てるために土を {返す}。

b ○家を建てるために土を {ならす [掘り返す]}。

→基本的に田畑などを耕す場合に用いられる。

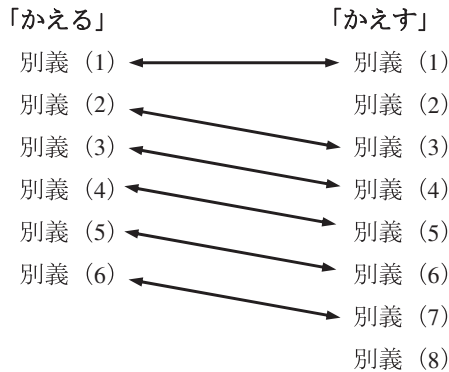
4. まとめ

以上、本稿では動詞「かえる」と「かえす」が持つ複数の意味を記述し、それら複数の意味の関連性（多義構造）について考察した。その結果、「かえる」については6つ、「かえす」については8つの多義的別義を認定することができた。

また、この2語は自・他対応動詞であるが、＜図3＞のように別義間にも基本的に対応関係にあることが分かった。つまり、「かえる」の6つの別義はすべて「かえす」の別

義に対応している。なお、「かえす」の別義(2)と(8)は対応する自動詞用法を持たない。

＜図3＞「自・他対応関係」



さらに、別義間の関連性については、隠喩（メタファー）、提喩（シネクドキー）、換喩（メトニミー）という3つの比喩の観点から考察を行い、別義間の関連性を明らかにすることができた。

最後に、多義語分析の結果に基づき、それぞれの別義の効果的な学習指導方法について考察した。具体的には、各別義における「コロケーション」を提示することによって学習を促すとともに、それぞれの別義において想定され得る「誤用例」も提示し、その理由・原因について検討した。

付記：本稿は『国立国語研究所基本動詞用法ハンドブック (<http://verbhandbook.ninjal.ac.jp>)』において、筆者が担当した「かえる」「かえす」に修正・加筆したものである。

注

- 1 「かえる・かえす」には、「返」「反」「帰」「還」「孵」という5種類の漢字表記があるが、「かえる・かえす」の意味の違い（多義的別義）に厳密に対応しているとは言えない場合がある。これについて、舩山（1994）では、同一の音形に複数の漢字表記が対応する場合について「1つの音に複数の漢字表記があり、漢字表記の違いが意味の違いに関与しない現象」を認めている。本稿においても、漢字表記の相違にのみ依拠する区分は行わず、あくまでも意味の相違にのみ注目するという立場で、以下の分析を行う。
- 2 国広（1982:97）は、多義語について「『多義語（polysemic word）』とは、同一の音形に、意味的に何らかの関連を持つふたつ以上の意味が結び付いている語を言う」と定義している。本稿にお

いてもこの定義に従う。

- 3 初山（2001:33）は「多義語の複数の意味には相互に何らかの関連が認められるのであるから、個々の多義語の分析にあたり、その関連の実態を明らかにすることが課題となる」とし、「メタファー、シネクドキー、メトニミーという3種の比喩が、複数の意味の関連づけに重要な役割を果たすと考えている」と述べている。

参考文献

- 北原保雄（2011）『明鏡国語辞典』第3版，大修館書店。
国広哲弥（1982）『意味論の方法』，大修館書店。
国広哲弥（1996）「日本語の再帰中間態」『言語学林 1995-1996』，pp.417-423，三省堂。
新村 出（編）（2008）『広辞苑』第6版，岩波書店。
松村 明（編）（2006）『大辞林』第3版，三省堂。
初山洋介（1994）「形容詞『カタイ』の多義構造」『名古屋大学日本語・日本文化論集』2，pp.65-90，名古屋大学留学生センター。
初山洋介（2001）「多義語の複数の意味を統括するモデルと比喩」『認知言語学論考』1，pp.29-58，ひつじ書房。
初山洋介・深田 智（2003）「第3章 意味の拡張」松本曜編『認知意味論』，pp.73-134，大修館書店。
森田良行（1989）『基礎日本語辞典』，角川書店。
森山 新（編著）（2012）『日本語多義語学習辞典 動詞編』，アルク。
山田忠雄・柴田 武他（編）（2012）『新明解国語辞典』第6版，三省堂。

例文出典

※本稿における例文は、以下のコーパスを参考にして作った作例である。

- (1) NINJAL-LWP for BCCWJ (<http://nlb.ninjal.ac.jp/search/>)
(2) NINJAL-LWP for TWC (<http://corpus.tsukuba.ac.jp/>)
(3) KOTONOHA「現代日本語書き言葉均衡コーパス」(<https://chunagon.ninjal.ac.jp/>)